

<学術論文>

「ときたら」構文と「といったら」構文の評価的意味

岩男考哲 信州大学教育学部言語教育講座

キーワード：主題、叙述の類型、「といったら」、「ときたら」、評価

1. はじめに

引用を表す助詞「と」と動詞で形成される複合辞の中に「といったら」「ときたら」という形式がある。この両形式は日本語記述文法研究会(2009)にも指摘があるように、意味的な接近が見られることがある。

(1) その男のいい加減さと(いったら/きたら), 言葉では表現できないくらいだ。
こうした例を通して両形式は「感情(森田・松木1989)」「評価(日本語記述文法研究会2009)」といった意味を表すとされてきた。確かにこの指摘は首肯できるものである。しかし意味の指摘に留まっており、両構文の意味は同質のものなのか、そしてこの評価的意味を帯びる両構文はどのように使用されるのか、といった点についての考察が管見の限りではその後十分には行われていないようである。

本稿では、こうした問題意識の下で両形式が使われる文をそれぞれ、「といったら」構文、「ときたら」構文と呼び考察を行っていく。本稿の構成は以下になる。まず2節で本稿の考察対象となる両構文の特徴を概観する。3節では先に示した評価的意味がどのように発生しているのか考察する。具体的には両構文ともに評価の意味を表すが、その意味はそれぞれ異なるレベルで発生していることを示す。そして4節で、その評価の意味や主題の性質によって両構文の叙述の類型に制限がかかることを示す。従来、叙述の類型研究は「は」を用いた提題文と無題文に注目が集まっていた。「は」提題文は非常に広い範囲の叙述の類型をカバーできる形式であるため、従来の研究では構文によって叙述の類型に制限が生じるという考えはなかったと言える。よって、叙述の類型研究の対象となる表現の範囲をより広げていくためにも本稿のような取り組みは必要だと考えられる。5節は本稿のまとめである。

2. 両構文の概観

本節では本稿が「といったら」構文、「ときたら」構文と呼ぶ表現の特徴と、両構文に関するこれまでの先行研究の指摘を概観する。

2.1 「といったら」構文

この構文の例には以下のようなものがある。

- (2) 抜き差しならない状態にはいったひきこもりは、健康管理のために自転車で遠出したりするが、その走行距離の長さといったら、ものすごい!! (BCCWJ¹⁾)

まずこの構文の特徴として、「言う」の動作主が生起できない点と、「言う」が否定形にならない点が挙げられる。

- (2') *彼がその走行距離の長さといったら、ものすごい。
 (2'') *その走行距離の長さといわなかったら、ものすごい。

これは引用構文と大きく異なる点である。

- (3) その場でズボンを出して、ショートパンツの上からするすとはいた。「だったら、これでいいんでしょう?」と言ったら、息を呑みながらも、「はい、けっこうでございます」ということだった。

(『村上朝日堂はいかにして鍛えられたか』村上春樹／新潮文庫)

- (3') 僕が「これでいいんでしょう?」と言ったら、「はい、けっこうでございます」ということだった。
 (3'') 「これでいいんでしょう?」と言わなかったら、「はい、けっこうでございます」ということだった。

このことは、「といったら」構文における「言う」は本動詞としての性質を失っていることを意味する。

また「といったら」構文の「と」に前接する語句の品詞は名詞に限定する。従って、以下のような名詞以外の例は考察の対象から外すことになる。

- (4) 林: この仕事、早く仕上げてほしいんだけど。
 小野山: 早くといったら、いつ頃まででしょうか?
 (5) 近藤: 最近、急に寒くなってきたね。
 山崎: そうだね。そうそう、寒いといったら、先月、北海道に行った時に珍しい人に会ったよ。

これは従来の叙述の類型研究において主題が扱われる際、その品詞が名詞に限られていることによる。先行研究でも「といったら」や次に見る「ときたら」は提題の形式として扱われる(三上1960, 森田・松木1989, 日本語記述文法研究会2009, 岩男2009, 益岡2012)。本稿もそれにならうことにする。

また「と」に名詞句が前接しても次のようなものは考察の対象としない。

- (6) 急な岩場や梯子場などを通過した後に、気がゆるんで転倒、滑落するケースもかなり発生している。なんでもない道に見えても油断は禁物なのだ。油断といったら、次のような事故例もある²⁾。

これは前出發話の一部を「と」で提示し、そこから連想する事柄を述べる表現である。しかし、これは「と」に前接する名詞句が述部の「説明対象(尾上1995, 堀川2012)」となっていない。文頭の要素が述部の「説明対象」であることは、当該要素を主題とするか否かを定める条件の

一つとされている。そのため(6)のようなタイプは考察の対象から外す。

以上が、本稿が「といったら」構文と呼ぶ表現の概要である。

2.2 「ときたら」構文

この構文は以下のようなものである³⁾。

- (7) 彼は、先ほどの見慣れぬ動物は、「馬」と呼ぶもので、鉄国で乗られている生き物であると説明した。「恐れることはない」とこちらも断定した。「足の速い牛のようなものだ」と。冠人の言葉で、猫の僕までもが安心できるのだから、その心強さときたら、大したものだ。(『夜の国のクーパー』伊坂幸太郎／東京創元社)

これも「来る」に動作主が生起できず、否定形にもなれない。

- (7') *彼がその心強さときたら、大したものだ。
(7'') *その心強さと来なかつたら、大したものだ。

「来る」は引用構文でも用いられるが、その場合動作主の生起や否定形は可能である((8)～(8''))。よって(7)の「来る」も本動詞ではなくなっていると言える(岩男2009)。

- (8) 今後「NSインターナショナル…」と来たら、その瞬間に「二次勧誘お断りだ！(ガチャン!)」と言う態度をとりましょう。

(<http://beyond.2log.net/akutoku/bbs/qa/pslg147088.html>)

- (8') 相手が「NSインターナショナル…」と来たら、その瞬間に「二次勧誘お断りだ！」と言う態度をとりましょう。

- (8'') 「NSインターナショナル…」と来なかつたら、その瞬間に「二次勧誘お断りだ！」と言う態度をとりましょう。

そして、岩男(2009)で〈連想〉と呼ばれる次のような例も考察から外す(例はいずれも岩男2009より)。

- (9) ープロ野球チームの選手の画像についてー
なぜ清原がいないのかってなー、確認とったほうがいいよねー。 ねー、なんでいないのーと。4番打者がなぜいない。普通、高橋、松井ときたら、次は清原だろー。
(10) 特に24巻は私が一番好きなファイリー編でしかも表紙にイエローが載っている！ときたらもう買うしかありません！！

これは各文の主題が「ときたら」に前接する要素ではない((9)の主題は「次(は)」で、(10)の主題は「24巻(は)」だと考えられる)点と「ときたら」が(11)のように「ときた」という形で文末で使用できる点⁴⁾から、「ときたら」構文とは別物であるという主張が岩男(2009)にある。本稿もそれにならうことにする。

- (11) いやまったく、今日という日は、お客はさっぱり、芝居はからつきし、おまけに
停電ときたね。(藤田2000)

また、2.1節で述べたように、「ときたら」構文も「と」に前接する要素は名詞に限る。

以上が、本稿が「ときたら」構文と呼ぶ表現の概要である。

2.3 両構文の意味

次に両構文の意味が先行研究でどう指摘されてきたか概観する。これまで一方の構文の意味に言及した研究は幾つか存在するが、両構文ともに扱ったものとなると数は少ない⁵⁾。本稿では森田・松木(1989)と日本語記述文法研究会(2009)をとりあげる。これらは辞書に類する書であるため分析過程の詳細までは述べられていないが、両構文を一定の視点から扱った研究であるためとりあげておきたい。

森田・松木(1989)は「係助詞の働きをするもの」の中に「といったら」と「ときたら」も挙げている。「といったら」について(「といえば」「というと」との比較を通して)次のように述べる。

「といったら」は、感嘆・驚きなどの感情を誘発した事柄を題目化しているもので、
それだけ話者の感情が強くこめられている (p. 51)

「ときたら」についても「不満・非難・自嘲などの気持ちが込められることが多」いとの指摘がある (p. 53)。

このように森田・松木(1989)では両者の関係について直接の言及はないものの、「といったら」に他の「言う」を使った複合辞(「といえば」「というと」と異なる意味(感情)が込められていること、そして「ときたら」にも話者の気持ちが込められていることが指摘されている。

日本語記述文法研究会(2009)は『は』以外の主題の表現』の一種として「といったら」と「ときたら」の一部を「ったら」類としてカテゴライズする⁶⁾。そしてその使われ方について次のように述べる。

人物や事物や事柄を主題として感慨をこめて提示し、それに対する話し手の評価を述
べるのに用いられる (p. 241)

ここでも、「といったら」と「ときたら」に話者の感情を示す意味が見られることが述べられている。

ここで両研究の対応関係を踏まえながらまとめる。森田・松木(1989)では「といったら」「ときたら」という形式に話者の「気持ち」「感情」が込められているとしている。それに対して日本語記述文法研究会(2009)は森田・松木(1989)の「気持ち」「感情」に対応するものとして「感慨」という概念を提示する。そして、それに加えて「感慨」が込められた形式を用いて提示した主題についての「評価」を述べるところまでが「といったら」構文、「ときたら」構文の働きだとしているのである⁷⁾。

以上のように、両構文が主題をある感情を持って提示するのと同時に話者の評価的意味も示すことが先行研究において指摘されてきた。本稿が注目したいのはこの評価的意味の部分である。両構文のこの評価的意味は同質のものなのだろうか。また、その評価的意味が両構文の使

用にどのような影響を与えているのだろうか。それを3節以降で考察していきたい。

3. 評価的意味のありか

本節では先に見た評価的意味が発生する理由が構文によって異なることを指摘する。

既述のように評価的意味は両構文に共通して見られるとされてきた。するとこの両構文における評価的意味は同質のものなのかという疑問が生じる。この問題について考えていきたい。この点について結論を先取りすると、「といたら」構文の評価的意味は述部の意味から生じており、「ときたら」構文のそれは構文そのもの⁸⁾が表していることを指摘することになる⁹⁾。

まずは「といたら」構文から考えたい。

- (12) 太平洋の魚の色彩の豊かさといたら、大西洋とは比べ物にならない。

(日本語記述文法研究会 2009)

こうした例の存在から「といたら」構文は評価的意味を持つとされてきた。確かに(12)には「太平洋の魚の色彩の豊かさ」の程度が甚だしいという話者の評価的意味が込められているように感じられる。しかしこの場合、「は」提題文と置き換えても評価的意味は残るように思える。

- (12') 太平洋の魚の色彩の豊かさは、大西洋とは比べ物にならない¹⁰⁾。

また、こちらがより重要なのだが、「といたら」構文には評価的意味を帯びているとは考えにくい例も存在するのである¹¹⁾。

- (13) 三重県阿山町丸柱は滋賀県甲賀郡と接している地である。ここでの門松は、庭に一カ所、松ワルキ(割木)を束にしたのに松とクロモジとサカキとを立てる。家によってサカキでなくフクラソウ立てるところもあると。三重の県北、桑名市近所の員弁郡員弁町楚原で、明治二十八年生れの市川つるえさんの聞かせるのは同じく松割木だったが、これを束にしたものを門両側に二、三束立てかけるという。一束といたら普通は一抱えほどの量だから、入口付近は割木の山になったことだろう。(BCCWJ)

- (14) 新しい技術によって、私たちがより豊かな色の世界を楽しむことができるのも、色の仕事を支えている人たちがいるからです。少し視点を変えてみると、本当にたくさん色の仕事がありますね。そう色のないモノはないのですから。色の仕事といたら、カラーコーディネイトだけではないのです。(BCCWJ)

(13)(14)は述部に評価的な語彙が生起していない例だが、これは非難や程度の甚だしさといった話者の評価的意味¹²⁾を表しているとは考えづらい。

以上の点を鑑みるに、「といたら」構文の評価的意味とは(12)のように述部に評価的語彙が生じた場合にのみ生じると言える。このことから、「といたら」構文の評価的意味は構文が独自に持つものではなく、述部に評価的意味を持つ語彙が生起することによって生じていると考えることができる。

次に「ときたら」構文について考えたい。

(15) あの男のいい加減さときたら, まったく腹立たしい。(日本語記述文法研究会 2009)
これも(12)のように, 述部に評価を表す語彙が生起している。しかし, 「ときたら」構文の場合, 「といったら」構文と異なり述部に評価的語彙が生起しなくても評価の意味が読み取れる。

(16) あの学生ときたら, さっきからずっと黙ったままだ。
これは「あの学生がさっきからずっと黙ったままであるコト」という〈事象叙述命題(益岡 1987)〉を含んだ「ときたら」構文だが, 「あの学生」に対する話し手の評価的意味を読み取るのが自然である。この場合, 「は」提題文と置き換えるとただ事実を述べただけという読みが優先され, 評価的意味が消えてしまう。

(16') あの学生は, さっきからずっと黙ったままだ。
つまり「ときたら」構文の場合, 評価的意味を表すために必要なのは評価の語彙ではなく, 「ときたら」構文そのものであることが分かる。このことから(16)で評価的意味を表しているのは「ときたら」構文そのものであることが分かる。よって, 「ときたら」構文は先の「といったら」構文とは異なり構文そのものに評価的意味があると考えられる。

また, 4節でも述べるが「ときたら」構文の場合, 評価的意味が感じられない表現では容認度が低くなってしまうこともこの主張をサポートする。

(17) ??あの学生ときたら, 図書館で勉強している¹³⁾。

以上の考察をまとめると, 先行研究において両構文に共通して見られるとされてきた評価的意味であるが, 「といったら」構文は述部の語句で評価的意味が表されており, 「ときたら」構文は構文自体にその意味がある, というように異なるレベルで評価的意味が表されていることになる。

4. 両構文の叙述の類型

本節ではまず両構文の叙述の類型上の分布を観察し, 両構文のそれが異なることを確認する。そして次に各構文の性質がその叙述の類型の分布にどう影響しているか考察する。既述のように, 従来の叙述の類型研究では構文によって叙述の類型の分布に制限があるという考えはあまり見られなかったと言える。本節の試みは今後より多くの表現を叙述の類型研究の対象にするための試みとも言えるだろう。

4.1 両構文の分布

まずは両構文が表す叙述の類型を観察する。便宜上, まず「ときたら」構文の観察から始める。既に何度も見てきたように, 「ときたら」構文は主題に対する評価を述べる。

(15) あの男のいい加減さときたら, まったく腹立たしい。
本稿では益岡(2012)にならい, これを属性の一種である「評価属性」と呼ぶことにする。
そして3節でも述べたが, 「ときたら」構文は〈事象叙述命題〉を文として提示することができるのであった。

(16) あの学生ときたら, さっきからずっと黙ったままだ。

この場合の（文レベルの）叙述の類型をどう捉えるべきであろうか¹⁴⁾。本稿では次のように評価の意味が読み取りづらい時、「ときたら」構文の容認度が低くなる点に注目する。

(17) ??あの学生ときたら、図書館で勉強している。

このことは「ときたら」構文はただ事象を述べるためだけには使用できず、常に評価を伴って使用されなければならないことを意味している。つまり(16)は、評価のきっかけとなる事象を提示しながら、間接的に「呆れた」「腹立たい」等、主題に対する評価を述べていると言える。よって「ときたら」構文は常に属性叙述文として使用されると考えられる¹⁵⁾。以下、先の(15)のような評価と区別するために(16)のような評価を含意する場合を「間接評価」と呼び、(15)のように評価を明示するものを「直接評価」と呼ぶことにする。以上の考察から「ときたら」構文は常に評価属性（直接評価・間接評価）を述べる文だと考えることができる。

次に「といたら」構文を見ていこう。既に確認したように、この構文は評価属性、中でも直接評価を述べることが可能である。

(12) 太平洋の魚の色彩の豊かさといたら、大西洋とは比べ物にならない。

これは魚の色彩の豊かさの程度を「大西洋とは比べ物にならない」くらいだと評価する表現である。

一方「ときたら」構文と違い、特定の事象を通して間接的に評価を表すのは困難である。

(18) *あれっ？あの学生といたら、まだ校庭を走ってるよ。

(cf. あれっ？あの学生ときたら、まだ校庭を走ってるよ)

ここからまず、評価属性に関して「といたら」構文は、直接評価は可能であるが間接評価は困難だとまとめることができる。

また、「といたら」構文は評価を伴わない属性叙述も可能であった。

(13) 三重県阿山町丸柱は滋賀県甲賀郡と接している地である。ここでの門松は、庭に一方所、松ワルキ（割木）を束にしたのに松とクロモジとサカキとを立てる。家によってサカキでなくフクラソウ立てるところもあると。三重の県北、桑名市近所の員弁郡員弁町楚原で、明治二十八年生れの市川つるえさんの聞かせるのは同じく松割木だったが、これを束にしたものを門両側に二、三束立てかけるという。一束といたら普通は一抱えほどの量だから、入口付近は割木の山になったことだろう。

これは、「ときたら」構文では容認度が低い。

(13') *これを束にしたものを門両側に二、三束立てかけるという。一束ときたら普通は一抱えほどの量だから、入口付近は割木の山になったことだろう。

(13)のように話者の評価のような主観的意味を伴わない属性を「一般属性」と仮称する。

以上をまとめると、「といたら」構文は述部で評価を明示する直接評価は可能だが、事象を提示し評価を含意する間接評価を述べることはできなかった。それに加えて、話者の評価を介在させない一般属性も述べられるのであった。これをまとめたのが次の表である¹⁶⁾。

	一般属性	評価属性	
		直接評価	間接評価
「といたら」構文	○	○	×
「ときたら」構文	×	○	○

各構文の評価の種類

4.2 構文の性質と叙述の種類の制限

4.1 節の考察で両構文の叙述の類型上の分布に制限があることが分かった。そこでこの 4.2 節ではその偏りの理由を各構文の性質を基に考えたい。

まず「ときたら」構文の叙述の種類の制限について考察する。「ときたら」構文は一般属性を表すことができなかった。ここで、本稿が一般属性と仮称するものがどういった性質の属性なのか考えたい。

- (19) 先週末から私はインドネシアのバリ島にきている。バリといたら地上の楽園ともいわれる南国の島国。

(http://eco.nikkei.co.jp/column/cycling_yamazaki/article.aspx?id=MMECCg000027042009)

- (20) レシートを見ると、「連絡後、1 週間以内に取りに来てください」と書いてある。AT&T から連絡がきたら、すぐに飛行機のチケットを予約してまたハワイに戻らなくてはならない。ちょうど、その頃といたら日本のお盆の時期とぶつかる。iPhone 3G のために太平洋を 2 回も渡るのはかなりつらい。

(<http://it.nikkei.co.jp/mobile/news/index.aspx?n=MMIT0f000007082008&cp=2>)

この「バリ」と「島国」のつながりや「その頃」と「お盆の時期とぶつかる」のつながりは話者自身が作ったものではない。(13)(14)も同様である。少なくとも、話者が主体的に下した評価という類の関係ではない。このように、一般属性とは話者が主体的に構築せずとも主題との間に成立しているものと考えられる。しかし、「ときたら」構文は構文そのものが評価的な意味を帯びるのであった。よって、一般属性のような話者の評価的な意味を帯びない表現はできないのである。つまり「ときたら」構文はそれ固有の意味が原因で評価属性に限定して使用されるということになる。

次に「といたら」構文はどうだろうか。これは一般属性と評価属性の直接評価が可能で間接評価が不可能であった。その理由も上記の考察から明らかである。「といたら」構文は「ときたら」構文のような、話者の評価的な意味を帯びていない。そのため評価的な意味を帯びない一般属性と評価の語彙が述部に位置する直接評価が可能なのである。そして構文自体には評価的な意味がないため、評価的な語彙の存在しない間接評価は不可能ということになる。

「といたら」構文の叙述の種類の偏りは以上のように説明できる。しかし、ここで新たな問題が発生する。「ときたら」構文と違い、「といたら」構文は評価的な意味を持つものでは

なかった。しかし「といたら」構文自体に評価的意味が無いのであれば、評価的意味を帯びないかたちで〈事象叙述命題〉を「といたら」構文で表せるはずである。ところが、(18)から明らかなように、実際には容認度が低い表現となる。そこで、なぜ〈事象叙述命題〉を文として表せないのか、その理由を考えねばなるまい。その理由を本稿は「といたら」構文の主題にあると考える。次のような例の場合、直接評価でも「といたら」構文の容認度が低い点に注目されたい。

(21) *私といたら、ほんとにだらしがないんですよ。

これは述部に「だらしがない」という評価的語彙が生起しているが容認度は低い。しかし、次のようにすると(21)よりも容認度が上がる。

(21') 一人暮らしを始めた頃の私は、嬉しくて、毎日遊んでばかりいました。その頃の私といたら、ほんとにだらしがなかったんです。

(21)と(21')の違いは主題の違いにあると考えることができる。(21)の主題はその会話の場に存在する人物「私」を直接指示するのに対して、(21')は既出の談話に登場した人物を指示する(岩男 2012)。このことから、「といたら」構文は時空間に存在する事物を指示する主題を提示するには不向きであり、談話上の事物等、会話の場に存在しない事物を指示する場合に一般属性や評価属性(直接評価)を述べるのが可能となることが分かる。

これを受けて〈事象叙述〉とはどういう性質の表現であるか考えたい。益岡(1987)において〈事象叙述〉は「現実世界の或る時空間に実現・存在する事象(出来事や静的事態)を叙述するもの(p. 21)」と定義されている。つまり、〈事象叙述命題〉を「といたら」構文で表そうとすると、主題は時空間に存在する事物となってしまう。しかし、既述のように、「といたら」構文の主題は、そうした表現に不向きであった。そのため、「といたら」構文では〈事象叙述命題〉を文として表すことができないのである。ちなみに、次のような状況では、「といたら」構文が〈事象叙述命題〉を文として表しているように見えるが、(18)に比べ容認度が高い。

(22) 伊藤: 畑さんが最近、喫茶店を始めたらしいよ。

平田: 知ってる、知ってる。そうそう。畑さんといたら、さっき河原町三条の雑貨屋で買い物してたよ。

しかしこれも主題が談話上の事物を指示していると解釈できるため容認度が上がるのだと説明できる。このことから「といたら」構文の成立には主題の性質が大きく関与していることが分かる。しかし(22)のような例を「といたら」構文の一例とし、「といたら」構文も〈事象叙述命題〉を文に含むことができるとするのはためらわれる。それは、既述のように「といたら」構文はその主題が時空間上の事物を直接指示しているのではないと考えることで、諸現象が統一的に説明できるのだが、そうした時にその主題が〈事象叙述〉の参与者(時空間に存在する事物)と合致しないのである。この問題は〈事象叙述〉の定義を考え直すのか、主題をどう定義するか等といった大きな議論に発展し得る。そのため本稿ではこの点については

保留とし、今後検討していきたい。

以上、本節では両構文の叙述の種類の制限の理由を各構文の性質に基づいて考察した。

5. おわりに

以上、本稿では「といったら」構文と「ときたら」構文の諸現象について評価の意味や主題の性質に注目して考察を行った。今後の課題は多々あるが、本文中で述べていないものの中から1つ挙げるとすれば、「ときたら」構文の評価的意味と「といったら」構文等で述部に評価的語彙が生じた時の評価の意味の関係について考察する必要があるだろう。これは語彙レベルの意味と構文レベルの意味の関係についての考察という大きなテーマである。これについて本稿で述べる準備はないが、今後考えていかなければならない問題である。

最後に本研究のこれからについて述べる。三上(1972)に「新マイの係助詞」は「名詞文に偏して使われる (p. 251)」という発言が見られる¹⁷⁾。本稿で扱った「といったら」「ときたら」も三上の言葉を借りるなら「新マイの係助詞」にあたると思われるが(森田・松木 1989 が両者を「係助詞の働きをするもの」としていたことを思い起こされたい)、これが用いられた両構文それぞれに独自の性質があり、それによって属性叙述文が偏るのであった。おそらく他の「新マイの係助詞」にも「といったら」「ときたら」のような独自の性質があり、それが叙述の種類に偏りを生んでいるものと推測できる。その性質とはどういったものか考えていかなければならないだろう。今後はこういった観点からの考察を更に行う必要がある。

注

- 1) 「BCCWJ」と表記された用例は大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所による「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を利用したものである。
- 2) BCCWJ の例を変えたもの。実例は「といったら」ではなく「といえば」が用いられている。
- 3) 本稿の「ときたら」構文は岩男(2009)で「評価」と呼ばれているものにあたる。
- 4) 「ときたら」構文の場合、「ときたら」という形であれば文末でも使用できるが (cf. うちの旦那ときたら…。), 「ときた」という形での文末用法はない。
- 5) 「ときたら」構文については、藤田(2000)や岩男(2009)、益岡(2012)を参照。
- 6) 「つたら」類には他に「つたら」と「つてば」が入れられている。
- 7) 森田・松木(1989)が日本語記述文法研究会(2009)と異なり各形式に込められた「感情」の指摘のみに留めているのは、「といったら」の「終助詞的用法」の存在を意識してのことかと推察される。終助詞的用法については森田・松木(1989)を参照。
- 8) 「ときたら」構文が評価的な意味を帯びようになった理由の解明は今後通時的な考察を待たねばならないが、この評価的な意味と「来る」の意味との関係について岩男(2009)に言及がある。
- 9) 「構文」という概念の内実については詳しく考えなければならない。しかしここでの考察

の主眼は両構文の評価的意味の違いを示すことにある。そこで本稿では「構文」とは「ときたら（／といったら）＋述部」の組み合わせのことをさす、といった程度の定義に留め、詳しくは今後の課題としたい。

- 10) 「は」と置き換えることで生じる意味の違いは「感慨」の方にあると考えられる。この「感慨」の内実についても今後考えていかなければならないが、敢えて引用形式を用いているところに注目すべきだろう。例えば「太平洋の魚の色彩の豊かさ（は／って）、大西洋とは比べ物にならないんだよ」のような「は」と「って」にも意味の違いが感じられる。このように「感慨」の意味の内実（「は」ではなく）敢えて引用形式を用いるという点から考察していくことが重要だろう。以上の点を鑑みるに、日本語記述文法研究会(2009)が「感慨」と「評価」を分けた点は高く評価すべきである。
- 11) 日本語記述文法研究会(2009)は評価的意味を帯びない「といったら」を「といえは」類（「といえは」「という」と「いいたら」）と呼んで、別扱いにしている。しかし、残念ながら「いたら」類と「といえは」類間の関係についての言及は見られない。
- 12) 日本語記述文法研究会(2009)に評価の具体例として「マイナス評価」「程度のはなはだしさ」が挙げられている。
- 13) もちろんこの例であっても「この非常時に図書館でのんびり勉強している」のような評価が生じる状況を想定すれば容認度が上がる（cf. やれやれ。あの学生ときたら、この非常時に図書館で勉強してるよ）。
- 14) 益岡(1987)では文レベルに限らず、語句レベルや命題レベルにも叙述の類型を認める案が提示されている。本稿も説明の便宜上この考えを用いることにする。
- 15) この評価を属性とする議論は益岡(2012)を参照。
- 16) また、「といったら」構文は〈指定叙述〉が可能だが「ときたら」構文は困難である。
 (i) 僕の好きな選手と（いいたら／??きたら）、やっぱりイチローだな。
 しかし、指定叙述文については事象叙述や属性叙述に比べると叙述の類型の観点からの研究の蓄積が少なく、不明な点も多い。そのため本稿は議論を属性叙述文に限定する。
- 17) 三上の一連の研究における「名詞文」とは属性叙述文と指定叙述文を指す（岩男 2008）。

参 考 文 献

- 岩男考哲(2008)「叙述類型研究史(国内編)」益岡隆志(編)『叙述類型論』pp. 163-191, くろしお出版。
- 岩男考哲(2009)『「ときたら」文をめぐって—有標の提題文が意味すること—』『日本語文法』9-2, pp. 105-121.
- 岩男考哲(2012)『「と言う」条件形を用いた文の広がり』『日本語文法』12-2, pp. 179-195.
- 尾上圭介(1995)『「は」の意味分化の論理—題目提示と対比』『言語』24-11, pp. 28-37.
- 日本語記述文法研究会(編)(2009)『現代日本語文法5』くろしお出版。

- 藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』和泉書院。
堀川智也(2012)『日本語の「主題」』ひつじ書房。
益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版。
益岡隆志(2012)「属性叙述の主題標識—日本語からのアプローチ」影山太郎編『属性叙述の世界』pp. 91-109, くろしお出版。
三上章(1960)『象は鼻が長い』くろしお出版。
三上章(1972)『現代語法新説』くろしお出版。
森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型』アルク。

付 記

本研究はJSPS 科研費 (24730731, 23531180, 24330243) の助成を受けたものです。

(2013年 1 月30日 受付)

(2013年 6 月13日 受理)